

【研究ノート】

嫌悪対象者に対する援助傾向

—援助を抑制する特徴は何か—

Characteristics of disliked people which inhibit helping behavior

河野和明*, 羽成隆司**, 伊藤君男*

Kazuaki KAWANO*, Takashi HANARI** and Kimio ITO*

キーワード：対人嫌悪，援助行動，被嫌悪回避，嫌悪対象者の特徴，嫌悪対象者に対する対処
Key word: interpersonal disgust, helping behavior, avoidance of "being disliked by others",
characteristics of a disliked person, coping pattern toward a disliked person

要約

本研究は、嫌悪する側の援助行動を抑制しやすい嫌悪対象者の特徴を明らかにすることを目的とした。嫌われる他者の特徴は先行研究によっていくつか指摘されている。質問紙では、現在実際に顔をあわせる人物の中でもっとも嫌いな人物およびニュートラルな人物を想起させ、その人物に対する感情、その人物の嫌悪的な特徴、その人物に対する援助傾向、被嫌悪回避の程度を尋ねた。その結果、嫌悪感は援助傾向と負の相関を示し、「自分との違いによる嫌悪」および「相手の自己中心性による嫌悪」がとりわけ援助傾向を抑制するのに対し、「相手への妬み」による嫌悪は援助傾向を促進することが示された。また、ニュートラルな対象者への感情と被嫌悪回避を分析した結果、尊敬と被嫌悪回避傾向が援助傾向を促進するのに対し、嫌悪は援助傾向を抑制することが明らかになった。これらの結果は、われわれは嫌いな人に対して援助傾向を手控えるが、広義の資源を多くもつと知覚される相手には援助傾向を維持すること、嫌われたくないという意識が援助傾向を増すことを示唆している。

Abstract

This study aimed to investigate which characteristics of disliked people inhibit helping behavior in those who dislike such people. Previous studies have pointed out some characteristics of disliked people. Questionnaire respondents were asked to choose and think about a person whom they disliked the most and another person toward whom they had

* 東海学園大学人文学部心理学科

** 椋山女学園大学文化情報学部メディア情報学科

neutral emotions. The respondents were further asked what emotions they had toward such persons and their characteristics, as well as how much the respondents wanted to help them and how much they wanted to avoid being disliked by them. The results showed that dislike and helping behavior had a negative relationship; it was shown that "dislike induced because of differences from the respondents" and "dislike induced by the selfishness of the disliked person" particularly inhibited helping behavior, while dislike induced by "envy toward the disliked person" positively related to helping behavior. Analysis of the emotions of the respondents toward the neutral persons and their avoidance of being disliked by the neutral persons revealed that "respect" and "avoidance of being disliked by others" related to helping behavior positively while "dislike" related to helping behavior negatively. The results suggest that we refrain from helping those whom we dislike, but we are likely to maintain help for persons if they are considered to have many resources, and we promote helping behavior when we do not want to be disliked.

問題

対人的な好悪感情をはじめとした人間に特徴的な社会的感情は、互惠的利他性 (reciprocal altruism) の維持に寄与していることが指摘されている (Trivers, 1971; トリヴァース, 1991)。これによれば、好悪の感情はその対象者に対する協力・非協力につながる。好意を感じる他者と友人関係を作り、その人に対して利他的にふるまう傾向は、利他的関係を形成する背景として機能している。一方、対人嫌悪は、相互の利他性を損なう人に対して向けられやすく、こういった人との友人関係を破壊するように作用する。結果的に、対人的な好悪の感情に従うことで人は相互に利他的であり得る他者を選択し、互惠的な関係を形成していると考えられる。

このことから、対人嫌悪の重要な機能のひとつは嫌悪対象者に対する援助傾向の制御であると考えられる。すなわち、対象人物に対する嫌悪感や嫌悪的な認知は、その人物に対する援助傾向を抑制するように働くと予想される。

対人嫌悪を感じる相手の特徴として、日本人大学生を対象とした因子分析的検討 (斎藤, 2003) によると8因子が示されている。また、対人嫌悪の類似概念として対人苦手意識をとりあげた研究 (日向野・小口, 1998; 日向野, 2008) でも、苦手な人の態度特徴が指摘されている。以前指摘したように (河野ら, 2014)、これらのリストでは、自分の社会的な立場や利益が直接的・間接的に相手から浸食される事態を示す因子 (相手の自己中心性・傲慢さ・偉そうな態度、相手への妬み・相手の魅力など) が共通して挙げられている。特に互惠的利他性維持の観点からは、相手の自己中心性や傲慢さといった互惠関係に脅威となる相手の特徴が援助傾向をとりわけ抑制する要因であると予想される。

一方、河野ら(2014)は「他者から嫌われること」を避けようとする傾向（被嫌悪回避傾向）の測定を試みた。他者から嫌われやすい一般的な特徴（例：過度の自己中心性など）は多くの人にとって自明なので、被嫌悪回避傾向は嫌われやすい特徴を表出しないように振る舞う傾向と関連していると考えられる。したがって、被嫌悪回避傾向が強い個人は互惠的であろうとする結果、他者に対する高い援助傾向を示すと予想される。

以上のように、本研究は、嫌悪する側の援助行動を抑制しやすい嫌悪対象者の特徴を明らかにすることを目的とした。その際、以下の3点を予測した。(1)対象者に対する嫌悪感ならびに嫌悪的認知は、対象者への援助傾向の低さと関係する。(2)嫌いな人物の否定的特性のうち、互惠の関係にとって脅威となる特性は対象者への援助傾向の低さとより強く関係する。(3)被嫌悪回避傾向は対象者への援助傾向の高さと関係する。これらを、嫌悪対象人物および感情的に中性の人物に対する援助傾向を測定することによって検討した。

方法

調査参加者

東海地方の大学生 402 名が質問紙調査に参加した（男性 123 名、女性 279 名）。参加者の平均年齢は 19.71 歳(SD = 1.13)、年齢範囲は 18~24 歳であった。

質問紙

調査参加者に対して、同性または異性の実在人物の想起を求め、続いて、その人物に対する感情や認知の評定を要請した。その人物として、「現在、直接つきあいのある身近な同年代」で「最も嫌い」もしくは「好きでない」もしくは「苦手に感じる」人物（以下、嫌悪人物）と「現在、直接つきあいのある身近な同年代」で「好きでも嫌いでもない」、「特段の感情をもたない」人物（以下、中性人物）とが指定されており、順序効果を相殺するために、[嫌悪人物-中性人物]の順と[中性人物-嫌悪人物]の順の質問紙を用意した。このため、質問紙で想起させる人物の組み合わせによって、「同性嫌悪人物-同性中性人物」「異性嫌悪人物-異性中性人物」「同性中性人物-同性嫌悪人物」「異性中性人物-異性嫌悪人物」の4種が作成され、これらのうちのいずれかひとつが調査参加者に割り当たるよう無作為に配布された。質問紙は主に以下の項目から構成されていた。

被嫌悪回避尺度 他者から嫌われることを避けようとする傾向を測定するために、河野ら(2014)の被嫌悪回避尺度を使用した。全10項目に対して5件法（1 = まったくあてはまらない~5 = まったくあてはまる）によって評定を求めた。

対象者に対する感情 友人関係における典型的な肯定的感情として「尊敬」「愛情」を、同じく否定

的な感情として「恐怖」「軽蔑」「嫌悪」を選定し、想起した対象人物に対する各感情について7件法（1 = まったく感じない～7 = 非常に感じる）で強度を測定した。

嫌悪対象者に対する否定的認知 あらかじめ嫌悪対象者についていただきやすい否定的認知項目を作成（12項目）し、評定値の合計点を否定的認知得点とした（ $\alpha=.87$ ）。評定は6件法（1 = まったくそう思わない～6 = まったくそう思う）によった。

対人的嫌悪感尺度 嫌悪人物の嫌悪的な特徴を測定するために斎藤(2003)が開発した対人的嫌悪感尺度を使用した。この尺度は、嫌いな他者の特徴を8種（「自分との相違による嫌悪」「相手への妬みによる嫌悪」「相手の傲慢さによる嫌悪」「相手の自己中心性による嫌悪」「相手の主張過剰による嫌悪」「自分との類似による嫌悪」「相手の外見による嫌悪」「相手の話し方による嫌悪」）の下位尺度から測定するものである。それぞれの下位尺度は、9項目、8項目、8項目、12項目、6項目、4項目、3項目、3項目から構成されていたが、本研究では回答時の負担を考慮し、各下位尺度の因子負荷量の大きい項目から5項目を採用した（構成項目数が5未満の「自分との類似による嫌悪」「相手の外見による嫌悪」「相手の話し方による嫌悪」の各下位尺度のみ全項目を採用）。各項目について6件法（1 = まったくそう思わない・まったくあてはまらない～6 = まったくそう思う・まったくあてはまる）で評定を求めた。

援助傾向を測定する項目 対象者に対する援助傾向を測定するために、小田ら(2013)の対象別利他行動尺度を改変した項目を使用した。各項目について6件法（1 = まったくそう思わない・まったくあてはまらない～6 = まったくそう思う・まったくあてはまる）で評定を求めた。

結果と考察

回答拒否や配布の際の偶然の偏りによって、前述した「同性嫌悪人物-同性中性人物」「異性嫌悪人物-異性中性人物」「同性中性人物-同性嫌悪人物」「異性中性人物-異性嫌悪人物」の各質問紙の回答者はそれぞれ、106名（男性30名、女性76名）、93名（男性35名、女性58名）、99名（男性29名、女性70名）、104名（男性29名、女性75名）となった。今回の分析では、異性と同性の対象人物をプールした。したがって、設定した対象人物には男女おおよそ同数が含まれていた。

回答者の援助傾向の性差

「嫌悪対象者の性×回答者の性」の2要因分散分析によって援助傾向得点の性差を検討したところ、有意な交互作用が認められた（ $F(1,390)=5.20, p<.05$ ）。嫌悪人物女性に対する女性回答者の援助傾向は、嫌悪人物男性に対する男性回答者の援助傾向および嫌悪人物男性に対する女性回答

者の援助傾向との間に有意差が認められた(テューキーのHSD検定)。このことは、嫌悪対象者であっても女性は同性に対して高い援助傾向をもつことを示している。

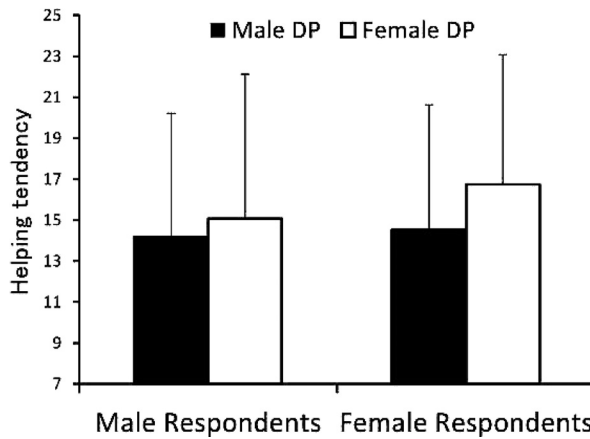


Figure 1. 回答者の性ごとに示した、嫌いな男女に対する援助傾向の平均値(DP:嫌いな対象人物)

嫌悪と援助傾向の関係

嫌悪人物に対する嫌悪感の単純評定と、対象人物に対する援助傾向との単相関を算出したところ、有意な負の相関が示された($r=-.37$, $N=304$, $p<.01$)。また、対象人物に対する嫌悪認知総得点と、対象人物に対する援助傾向との単相関にも有意な負の相関が示された($r=-.67$, $N=304$, $p<.01$)。これらは、嫌悪感が強ければ援助傾向が抑制されることを示すものと考えられる。

嫌いな特徴と援助傾向の関係

嫌悪人物の嫌いな特徴8因子のうち、身体的特徴(「相手の外見による嫌悪」「相手の話し方による嫌悪」)以外の6因子を独立変数、当該嫌悪人物に対する援助傾向を従属変数とした重回帰分析を行った結果、モデルは有意であり($F(6,368)=18.73$, $p<.01$, $R^2=.23$)、「自分との相違」「相手の自己中心性」による嫌悪が援助傾向と負の、「相手への妬み」による嫌悪が正の、有意な偏回帰係数をそれぞれ示した(Table 1)。

これらから、相手が自分と異なる、あるいは、相手が自己中心的と認知するほど、援助量を抑制することが示唆される。互惠性維持の観点からすれば、相手との相違が大きいことは将来的な利害対立を示唆するし、自己中心性は互惠関係におけるフリーライダー的戦略を予想させる特徴と考えられる。したがって、これらの特徴が援助傾向を大きく抑制させる要因となっていると解釈できるだろう。一方、「相手への妬み」の項目(「自分よりも優れている」「自分にとってうらやましい面を持っている」など)は相手の価値が大きいとする認知を示すものと考えられ、嫌いな相手でも知覚される相手の価値や相手のもつ広義の資源量に応じて援助行動を増大させているもの

と解釈できる。

Table 1. 嫌悪人物について、援助傾向を従属変数とし、嫌いな特徴6種を予測変数とした重回帰分析の結果（強制投入法）。

| | β | t | p |
|---------------|---------|--------|------|
| 自分との相違による嫌悪 | -.119 | -2.219 | .027 |
| 相手への妬みによる嫌悪 | .306 | 5.854 | .000 |
| 相手の傲慢さによる嫌悪 | -.066 | -1.063 | .288 |
| 相手の自己中心性による嫌悪 | -.171 | -2.759 | .006 |
| 相手の主張過剰による嫌悪 | .006 | .118 | .906 |
| 自分との類似による嫌悪 | .062 | 1.211 | .227 |

被嫌悪回避と援助傾向の関係

中性人物に対する5種の感情と被嫌悪回避得点を独立変数、対象人物に対する援助傾向を従属変数とした重回帰分析を行ったところ、モデルは有意であり($F(3,380)=34.82, p<.01, R^2=.27$)、尊敬と愛情は正の、嫌悪は負の、被嫌悪回避は正の有意な偏回帰係数をそれぞれ示した(Table 2)。

Table 2. 中性人物について、援助傾向を従属変数とし、5種の感情と被嫌悪回避傾向を予測変数とした重回帰分析の結果（強制投入法）。

| | β | t | p |
|-------|---------|--------|------|
| 尊敬 | .259 | 4.878 | .000 |
| 愛情 | .308 | 5.999 | .000 |
| 恐怖 | -.03 | -.494 | .622 |
| 軽蔑 | .009 | .101 | .919 |
| 嫌悪 | -.164 | -2.007 | .045 |
| 被嫌悪回避 | .106 | 2.369 | .018 |

ここでも、嫌悪感が援助傾向を減じる一方、尊敬や愛情が援助傾向を増大させることが示されると同時に、「嫌われたくない」と思う傾向が対象人物への援助を増やすように作用していることが示唆された。

まとめと今後の課題

以上、対人嫌悪が嫌悪対象者に対する低い援助と関係すること、自己中心性と自分との相違が低い援助傾向と関係すること、被嫌悪回避傾向が高い援助傾向と関係することが明らかになった。これらは、冒頭で述べた3点の予測を支持する結果といえる。また、相手への妬みによる嫌悪や

尊敬や愛情が援助傾向の高さと関連することも明らかになった。われわれは嫌いな人物に対して援助傾向を手控えるが、広義の資源を多くもつと知覚される相手には援助傾向を維持すること、嫌われたくないという意識が援助傾向を増すことが示唆された。今後は、対象者の知覚される価値などを測定した上で対人嫌悪と援助傾向のより詳細な関連を明らかにすることが課題となろう。

引用文献

- 日向野智子, 小口孝司, 1998. 青年期の対人関係における苦手意識. 昭和女子大学生活心理研究所紀要, 1: 43-62.
- 日向野智子, 2008. 人を苦手になる. In: 加藤司・谷口弘一編, 対人関係のダークサイド, 北大路書房, pp.76-88.
- Kawano, K., Hanari, T., Ito, K., 2011. Contact avoidance towards people with stigmatic attributes: seen from the opposite aspect of mate choice. *Psychological Reports*, 109: 639-648.
- 河野和明, 羽成隆司, 伊藤君男, 2014. 他者から嫌われることを避ける傾向の個人差. 東海学園大学研究紀要, 19, 155-165.
- 小田亮, 大めぐみ, 丹羽雄輝, 五百部裕, 清成透子, 武田美亜, 平石界 2013. 対象別利他行動尺度の作成と妥当性・信頼性の検討. 心理学研究, 84:28-36.
- 斎藤明子, 2003. 対人嫌悪感情に対する社会心理学的研究. 九州大学心理学研究, 4: 187-194.
- トリヴァース, R. (中嶋康裕・福井康雄・原田泰志 訳), 1991. 生物の社会進化. 産業図書.
- Trivers, R., 1971. The evolution of reciprocal altruism. *Quarterly Review of Biology*, 46: 35-57.